

一 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。「」内の表現は、直前の語について説明したものです。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

話し言葉と書き言葉とは、そもそも発語される場面や状況が大きく異なっています。話すときは、たいいていの場合、話しかける対象が生身の現在形で存在しているから、ひとりごとを除いて、その場で誰かがうなずいたり、笑ったり、突っ込んだり、無視してくれたりする。人はそれらの反応を意識し、その影響を受けながら言葉を発するわけです。反応が言葉である場合は、そこから新たに言葉のやりとりが始まったりもします。

一方、書くという営みは、基本的に一人で行うのです。たとえば誰かにあてて書く場合でも、そのあて先になる他人は目の前にはいないし、その場で反応を確かめられるわけでも、そこから会話が始まるわけでもない。

あらためて言います。書き言葉には、声音や表情や身振りのような補完的要素がない。純粹に、文字という「もの」だけで勝負しなければならぬ。また、書き言葉には、その場でのレスポンスもない。つまり、一人で孤独に発語しなければならぬ。そういうことです。

話し言葉には、状況に即応する瞬発力がありますから、言葉のやりとりから、場の「ノリ」をつくりだすこともできます。うまくかみ合った会話が、ちょうどいいテンポで弾むと時間を忘れるくらいに楽しい。テレビに出ているお笑いの人みたいな「運動神経」のいい人がいれば、本当に面白くなることもある。

じっくりと丁寧に考えながら、誰かと「話しこむ」のもいいです。そういう経験は、その「誰か」と「私」との関係を深めるだろうし、場合によっては何か大事なことを考えたり、学んだりする機会にもなるでしょう。

ただし、話し言葉には言葉としての無駄が多い。またその時々感情やその場の空気に影響されやすいこともたしかです。だから話し言葉は、多くの場合、言葉としては表面的なものになりがちで、しかも、忘れてしまいがち。

書き言葉には、みんなでわいわいとバカ話をして盛り上がるような楽しさはありません。対話をとって誰かと互いに分かり合っていくような経験も伴いません。そのかわり、人と話すのが苦手な人、コミュニケーションが得意な人でも発語することができません。そこにいる誰かに気をつかったり、場の空気を読んだりする必要はありません。

何かをじっくりと、自分のペースで解きほぐしたり、掘り下げたりしながら、よ

この「もう一人の自分」は、まず、何か書いているその瞬間から、存在しています。

書き言葉は、話し言葉とは正反対に、書いたその瞬間からそこに「ある」ものになる。これはつまり、観察したり、吟味したり、分析したり、批判したりする「対象」になるということです。書いたその瞬間には、すでにその言葉を確かめ、吟味する自分がある。漫才で言えば、ボケた自分に、すぐツッコミを入れる自分が常にいる。そういう状態で、僕たちは書いている。言い換えれば、必ず「考えながら」書いている。

さらに「I」の自分が行う「推敲」という作業があります。これは、「II」の自分」が書いたものに自らダメだしをして、添削を「a」ボドコす作業。添削と言っても、ただ間違いを直すだけではありません。よくよく吟味しながら、無駄はないか、くどくないか、筋が通っているかなどをチェックする。必要ならば書き加えたり「b」ハブいたり、書き直したりする。「推敲」のおおもととは、詩をつくっている人が「推す」か「敲く」かで、我を忘れるくらいに考えるというエピソードなのですが、表現としてこの言葉でいいのか、別の言葉があるのではないかといったところも、考えるというか悩む。

我を忘れるくらいまで悩まなくても、人は一度書き終えた文章を必ず読み返すものです。

〈中略2〉

それは、なぜか。書き言葉というのは、書いてしまったらそれっきりだから。つまり、「書きつきり」だからなのです。

〈中略3〉

送信してしまったメール、ツイートしてしまったつぶやき、サイトにアップしてしまったブログや小説も同じことです。

⑥ ひるがえって、だからこそ人は書くのである、とも言えます。書くという営みは、何度か言うように、この世界に「自分」を彫りこむことなのです。だから、時間もかかるし、エネルギーも使うわけです。

「書きつきり」ということでは、もうひとつ大事なことがあります。一度書いた文章を、同じようにもう一度書くことはできないということです。つまり、二度と同じ文章は書けない。これも、あたりまえのことなのに、意識されにくいことのひとつです。

だってそうでしょ？ 同じものを書けるとしたら、それはたんなるコピペ（コピー&ペースト）であって、コピペという作業は「書く」とは、まったく違うことな

り丁寧により繊細に、より深く考えるために、もっといえば自分のなかの深いところまできちんと表現するためには、書くことがいっばん有効な手段なのです。

〈中略1〉

一人で孤独に書く。だからこそ人は書くときに、読者を想定しなければならぬのです。

言い換えれば、言葉は必ず「誰か」に読まれるためにこそ書かれるのです。正確に言うなら、前にも述べたように、書き言葉は、書かれたその瞬間から、時間も空間も超えて、どこかの誰かに読まれる可能性をはらみながら存在し続けるのです。

このことをやや大げさに言い換えれば、書かれた言葉は、書かれたその瞬間から世界に属するということになります。

④ 書かれた言葉は、書かれた瞬間から世界に属する。つまり、この世界の一部になる。印刷技術が発達し、インターネットが飛躍的に進化し、出版産業やネットが毎日何十万、何百万の言葉を発信し続ける今日、この「書かれたらずっと存在し続け、どこかの誰かに読まれるのかも分らない」という事実はかえって意識されにくくなっているように思えます。これは毎日印刷される膨大な量の言葉や、その何十倍にも相当するであろうネット上の言葉の大部分が、読み流され、読み捨てられ、あるいは、最初からほとんど誰にも読まれていないのかもしれないという事態に対応した感じ方なのかもしれません。たとえばツイッターで百字そこそこ「つぶやく」なんてことは、石ころだらけの河原に一個の石を投げ込むようなことですから。

でもね、どんなにささいな言葉でも、どんなにくだらぬ内容でも、書かれた言葉は確実にこの世界の一部分として、どこかの誰かに読まれるために存在し続けるのです。前に書いたように、話し言葉は「ことがら」で、書き言葉は「もの」です。「ことがら」としての話し言葉は、録音・録画・速記などによって「記録」できるようなになっていますが、書き言葉は初めから「記録」そのもののなのです。このことを意識しているかどうかは人によって違うのですが、日記にしてもツイッターにしても、何かを書く人は、それが「記録」として残るものであるからこそ書いているのだと思います。

書かれた言葉というものは、「もの」として残る。これは、大量にコピーされる印刷物のための言葉や、世界中で見られるネット上にアップされる言葉だけの話ではありません。

話し言葉に必ず聞き手がいるように、書き言葉には必ず読者がいるものです。例えば、厳重に鍵のかかる、いつか焼き捨てるつもりでいる秘密の日記のようなものでも、確実に一人の読者がいる。それは、「もう一人の自分」です。

のですから。

こういう性質のことを「一回性」と言います。芝居や舞踏や音楽やスポーツの試合など「ライブ」な表現には、必ずこの一回性が伴っています。同じことは二度と体験できない。だからこそ、人は、高いチケット代を「b」払って、芝居やライブを見に行く。同じ芸術でも、彫刻や絵画や建築や映画や小説は、基本「もの」だから、何度でも同じものを鑑賞することができる。だから、鑑賞するのに、そんなにお金はかからないわけです。この値段の違いは、「一回性」があるかないかの違いです。

それは、観客として鑑賞者としての立場からは、たしかにその通りなのですが、つくる立場、描いたり、書いたりする立場で考えてみてください。絵でも、彫刻でも、映像作品でもCDでも、そうでしょうが、同じものは二度とつくりません。その意味では、まさしく「一回限り」です。

文章もまた、「一回限り」なのです。

⑦ 「書く」ことには、相当なコストがかかるのです。

〈中略4〉

「読む」のかかる時間の、最低でも十倍くらいかけて「書く」わけです。このことは、例えば、十分に読み終わる漫画、二時間で見終わる映画、一時間で聴いてしまふCDなどが、どれほどの手間暇かけてつくられているのか、ということと、ほぼ同じことのように思えます。もちろん、これらの制作は、お金のかかり方も桁が違います。とくに映画は、大勢の人間が協働してつくりあげるものですから、単純な比較はできません。

「書く」ことには、あまりお金はかかりません。そのかわり、みんなの知恵を集めて協力してできることもあります。なにしろ「書く」というのは、言葉だけを使う表現です。この「言葉だけ」という点が、実に面倒くさい。つまりコストがかかるゆえんなのです。

言葉というのは、そのときどきの都合に応じて、どこからか手に入れるものではありません。自分の中にあるものです。ただし、あらかじめ頭の中に言葉があるわけではない。書くことによって、自分の中から引き出されてくるのが言葉です。そもそも、あらかじめ頭の中にある言葉をそのまま文字にしていただけだったら、こんなに楽なことはないのですが、「書く」というのは、そういう営みではありません。

「ありのまま」に書く、とよく言われます。心のありのままに、自分に正直になるほど、たしかにこれは、言葉を発するときの構えとして、少なくとも書くときの姿勢として、いっばん大事なことにように思えます。でもね、「ありのまま」って、

言うほど簡単なことではない。いや、正確に言うなら、「心のありのまま」に書くなんてことは、そもそも不可能なことなのです。

第一に、「心」とはどういうことか。「心」というか、それとも「脳」というかはともかくとして、それはまず感覚でしょう。感覚とは、人間が五感で感じている、その感じそのもののことです。これを情報量にすると、毎秒何億ビット（情報量の単位）とかになるそうですが、もちろん、その大部分は、気がつかないうちに脳が勝手に処理してくれます。で、処理しきれないところが、意識されて、なんか暑いとか、だるいとかの「気分」になる。他者との関わりの中なかでも人の心は、まず「感じ」ています。なんかもやもやする、ちよつとムカつくなどの「感情」になる。ただし、これらを感じた瞬間には、「暑い」も「だるい」も「ムカつく」も、まだ言葉として存在していません。つまり、正確に言えば、「気分」以前、「感情」以前の状態です。

そこで、まず、言葉にしようとする。例えば、誰かとの関係がうまくいってない感触があるとき、「ムカつく」とか「なんだあいつ」とか。他人の心は分からないから、あれこれと考えてみる。でもやっぱり分からない。このとき、実は自分がどう思っているのかも、どうしたいのかも、よく分からない。だからもやもやしたままになる。最後には「もうどうでもいいや」と投げけてしまつて、このもやもやを忘れるとする。こんなときの心の動きを、形に例えるなら、膨らんだり縮んだり、大きくゆがんだり元に戻ったり、荒れ、クルったかと思うと不意に静かになったりとか、つまえどころがない。

人間の内側にあるのは、目に見えない、形のない、しかも常に揺れ動き、変化し続ける「感覚」や「気分」や「感情」で、これはまだ言葉じゃない。言葉になる前のカオス「無秩序な状態」です。このカオスを整理し、はつきりとした形を与え、「思い」や「考え」にしていくこと。言葉を発するというのは、このような営みなのです。ところが、いつも動いている心にたいして、言葉は、まったく追いつかない。どうしようもなく足りない。「ムカつく」と言ってみても、自分が感じていることのよく表面を、ほんの一部分を表しただけだったりする。

常に千変万化している「心」のありようにたいして、言葉は圧倒的に足りない。「言葉にしたら嘘になる」なんてよく言うけれど、一度形にしてしまえば、常に揺れ動く心のありようとのズレが生じるのは当然のことです。

それでも、あえて形にする。つまり、書いてみる。できるだけ丁寧に、心を、言葉ですくいとつていく。そこには、形にしようことの恐ろしさや、なかなかうまく言い表せないじれったさがある一方で、もやもやしている何かが、少しずつではあっても、徐々に整理され、クリアになっていく気持ちよさがあります。さらに、

問6 次の文は、傍線部⑤「石ころだらけの河原」のたとえについて説明したものです。空欄に入る適切な言葉を本文中から四十字以内で抜き出し、始めと終わりの五字を答えなさい。

「石ころだらけの河原」とは、（ ）
（ ）のような言葉があふれる、大量の印刷物やネット上の画面のたとえとして用いられている。

問7 空欄Ⅰ・Ⅱに当てはまる語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア	Ⅰ	未来	Ⅱ	過去	Ⅰ	Ⅰ	現実	Ⅱ	空想
ウ	Ⅰ	本音	Ⅱ	建前	エ	Ⅰ	素人	Ⅱ	玄人

問8 傍線部⑥「ひるがえって」の意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 暇があつて イ 振り返つて ウ 本質的に エ 反対に

問9 傍線部⑦中の「コスト」とは、具体的には何を指しますか。傍線部⑦以前の本文中から二つ抜き出し、答えなさい。

問10 次の文は、本文を読んだ明子さんと先生による会話です。空欄Ⅹ・Ⅺに入る適切な表現を自分で考え、答えなさい。また空欄ア・イは傍線部⑤以降の本文中から最も適切な表現を抜き出し、それぞれ指定の字数で答えなさい。

明子 本文の最後に書いてある「自分や世界を『分かつて』いくことの面白さ」ってどういうことですか？

先生 「分かつて」という言葉の意味を考えるといいよ。

この気持ちよさの先には、書くことをとおして自分や世界を「分かつて」いくことの面白さがあるのです。

（森下育彦著『私』を伝える文章作法より）

問1 太線部a「ホドコ（す）」・b「ハブ（いたり）」・c「ハラ（つて）」・d「クル（つた）」をそれぞれ漢字に直しなさい。

問2 傍線部①「書く」という営みは、基本的に一人で行うのです」とありますが、「二人」で「書く」ことの利点について述べられている一文を（中略1）以前の本文中から抜き出し、始めの五字を答えなさい。

問3 次の文は、傍線部②「運動神経」のいい人について説明したものです。空欄に入る適切な漢字二字を答えなさい。

ここでの「運動神経」のいい人とは、「受け答えが□□即妙にテンポよくできる人」のことを指している。

問4 傍線部③「じつくりと丁寧に考えながら、誰かと『話しこむ』」のような行為を著者は何と呼んでいますか。傍線部③から（中略1）までの本文中から二字で抜き出し、答えなさい。

問5 傍線部④中の「世界に属する」を分かりやすく言いかえた部分を、傍線部④から（中略2）までの本文中から二十字で抜き出し、始めと終わりの五字を答えなさい。

明子 「分かつて」は、辞書には「きちんと切れ目をつけてそれぞれ独立した存在にする意。」とあります。自分や世界が一つになっている状態だとしたら、それに切れ目を入れて、いくつかの要素に分けるということでしょうか？

先生 そのとおり。人は、すでにある状態を言葉で表すだけではなく、自分でも説明しきれないはつきりしない心や未分化の世界を言葉に表すことによって、自分でも気付かなかったありようが見えてくることがある。例えば、名もない雑草に「たんぽぽ」と□□すること、その植物が今までは違った独立した存在に感じられたり、飼っている犬に「シロ」と□□すること、その犬は他の犬とは異なる特別な存在として感じられたりするよね。これは「憧れ」や「恐れ」といった人の「ア（二字）」にも同じことが言えるんだ。

明子 言葉を発することによって自分の心の中の「イ（四字）」の正体が明らかになるのはわかります。でも心は目にも見えないし、いつも揺れ動いて変化し続けているから、言葉ではつきりさせてしまうことで、かえってその心の間に「ウ（六字）」ことがあるんじゃないでしょうか。

先生 そうだね。そこで「書く」ということが重要になってくるんだよ。

明子 うーん、どういうことでしょうか？ 心を言葉で表現するには、必ずしも書かなくても「エ（四字）」であっても同じ効果が得られませんか？

先生 いい質問だね。ただ、「エ」と違って書き言葉は必ず「オ（二字）」されるという前提がある。さらに、書き手の立場に立てば、同じ文章は二度と書けないという一回性も念頭にあれば、そのような緊張感があるからこそ、文章を書くにあたっては□□。そしてそれが自分の心の中や世界の深部を掘り下げていくことにつながっていくんだ。だから「書く」ことによってより深く自分や世界を「分かつて」、つまり「分かつて」いくことができるって言えるんだよ。

明子 「書く」ことって実は奥が深いんですね。これからはそういう面白さも味わいながら「書く」ことを楽しみたいと思います。

二 次の文章は、市川朔久子著『ABC! 曙第二中学校放送部』の一節です。本文を読み、後の問いに答えなさい。「」内の表現は、直前の語について説明したものです。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

本庄みさととは曙第二中学校三年生の放送部員です。四月から同じクラスに転校してきた真野葉月は、みさとの誘いもあって放送部に入部します。二人は部員の新納・古場・珠子とともに放送コンクールへの出場を目指して活動していますが、葉月はあくまでアドバイザーの役割にとどまっています。

本文はある日曜日、みさとと葉月が朗読のCDを視聴するために図書館へ行った場面から始まります。

小一時間ほどがんばって聴いて、葉月とみさとは表に出た。

ドアをくぐって大きく伸びをする。空がまぶしかった。図書館に隣接する公園まで足を伸ばした。こちらのほうが気持ちのいい木陰が多い。自動販売機で飲み物を買ってベンチに座る。葉月は今日もネクターを買った。

「どう。なんとなく、わかった?」

「うんまあ、なんとなく、だけど……」

間のことを言っているのだろう。

「ええと、……緊迫するところではテンポよく、期待を持たせるところではじっくりと。そして終盤の余韻を持たせるところではさらにゆっくり、みたいな——?」

葉月は大きくうなずいた。

「そう、そのとおり。さっきのみたいに物語を表現するのに大切な部分よね。でも今回本庄さんが読むのはニュースでしょ。あともうひとつ、大事なことがある。覚えてる? 前に言ったでしょ、呼吸、って」

「ああ、えっと、腹式?」

「違う! そっちじゃなくて」

じれたように言ったあと少し考え、手にしたネクターを一口飲んでキュツと蓋をした。

「わっ」

① 葉月がふいに手に持ったネクターのボトルを放ってきた。あわてて手を出しどうにかつかみとる。なかでクリーム色の液体がたふんと跳ね、ふっと甘い香りがした。

「相手が、きちんと言葉を理解する間を与えること。早すぎず、遅すぎず、相手との間合いを計ること」

「だって」

傘の下で葉月は顔を赤くしていた。

「言っとくけど、技術のことじゃないからね。——もっと、べつのこと」

足元の水たまりを避けながら、難しいやつぱり、と言う。

「難しい? 葉月でも?」

「あたりまえでしょ」

「……葉月はすごいと思うけどなあ。読んでもうまいし、ディレクター的なことだって」

才能あるもの、と言うと、葉月は目を伏せた。怖いから、とその口元が動いた気がした。

信号が赤になり、横断歩道で立ちどまる。雲が薄れ、空が明るくなってきた。雨もほとんどやみ、そろそろ傘をたたもうかと思ったとき、すぐ近くでカシヤリと音がした。つづけて声がする。

「撮れた?」

「オッケー、撮れた!」

自転車にふたり乗りをした男子生徒が、こちらに携帯電話を向けていた。葉月が、ぱつと顔をそむける。

「あーっ、くそ、もうひとりも入っちゃった」

うつそマジかいらねー、と言いながら、あつというまに自転車を漕いで逃げていった。みさとたちの持っているかばんとほんの少しデザインが違う。曙第一中の生徒だろう。

憤然とする葉月のそばで、信号が青に変わる。みさとはほとんど無意識に歩きだしていた。

いらねー。

④ たった今投げつけられた言葉がまだそこに放りだされたままだ。葉月が後ろから追いついてきた。

「……やつぱり、わたし才能あるかも」

友達傷つけるの、とつぶやき、それきり口を開かなかった。

へ 中略2 翌日、みさとと葉月は部活動で顔を合わせますが、昨日の一件以来ぎくしゃくした関係が続いています。

「——じゃあ、こっちはあとは編集作業だけど、本庄さんどうする? ニュースのアナウンス、最後にもう一回録りなおしたいって言ってたよね」

古場に聞かれ、みさとは立ちあがった。

葉月が手を出すので、みさとともそれを放りかえす。葉月はしっかりと受けとめた。「息を合わせる、って言うでしょ。その、呼吸よ」

葉月は受けとったボトルの蓋を開け再び口をつけた。

「う、うん。わかった」

うなずきながら思った。葉月は、やつぱりすごい。

葉月が読めばいいのに。また、言ってもしかたのない言葉が頭に浮かんできた。

へ 中略1

下校時刻が近づき、部員たちは急いで片づけをして校門を出た。再び降りだした雨が曙杉の葉を濡らし、緑をいつそう鮮やかに際立たせている。

坂の途中で珠子たちと別れ、葉月とみさとのふたりで歩く。新納は友達と約束があると先んじて帰ってしまった。開いた傘の布地を雨粒がやわらかくたたいていく。

録音は葉月の声が入らないまま順調に進んでいる。

このあいだ古権沢先生(担任で生活指導の先生)とやりあったこととおおいに^②発奮したようなので、今度こそ本気で参加してくれるのではないかとかすかに期待したのだが、葉月自身そこに触れようとはしなかった。約束なのでみさととも黙っている。それにしても——。

なにが葉月をそんなに頑なにしているのだろう。

「葉月はさ」

③ 傘でたがいに守られているような気がしたからだろうか。ふと言葉が口について出た。

「この先ずっと、アナウンスはやらないの?」

手厳しい答えが返ってくるかと身がまえたが、葉月は無言のままだった。

——間は、呼吸。

一息おいて再び声をかける。

「……なんで?」

そつと触れるように尋ねた。

葉月の顔は水色の傘に隠されて頬から下しか見えない。返事を諦めかけたとき、ぼつりと声がした。

「……自信がないから」

「——はあ? なんで?」

傘ごと勢いよくふり向いていた。葉月が顔をしかめる。

「ちよつとやめて、雫が飛ぶじゃない」

「……ああ、うん。じゃあ、やつとく」

アナウンス部門と朗読部門は、出場者が多いため事前に予選用の作品を録音して提出しておく。通過した者が本選の地区大会当日、同じ作品をステージ上で読みあげるようになっていた。よけいな雑音が入らないように、ひとり防音室に入る。静かな部屋でマイクに向かって原稿を読みあげる。

〈学校へつづく長い坂道を上りつめたところに、一本の大きな木があります。メタセコイアの本です。和名は曙杉といい、この学校の名前、「曙第二中学校」にちなんで植えられたものと言われています——〉

へ 中略3 みさととは原稿を読みながら、かつて仮入部していたバスケットボール部のことを思い出しています。

どうして今ごろこんなことを思い出してしまうのだろうか。

ふわりと心が漂う。——まだあの場所にいたら。

みさとは、今ごろどんなふうになっていただろう。いい選手になっていただろうか。今よりも、もっとずっと活躍できていただろうか——。

「本庄さん!」

スピーカーから古場の声がした。はつとして前を見ると、ガラスの向こうに部員たちの姿が見えた。

「勝手に切ってごめん。でも、あのままだと時間オーバーしそうだったから」

じゃあもう一度、と言われてみさとは原稿に目を落とした。そうだ、集中しなければ。今は、ここがみさとの居場所だ。再び読みはじめる。

同じ場所でもなんでもつかえ、五度目でようやくうまくいき、ほつとして顔を上げると、ガラス越し、明るい部屋に、古場と新納と珠子と葉月がいた。談笑しているようだがみさとは聞こえない。そのときすいと影が動いて、葉月の後ろに背の高い新納の姿が重なった。

つぎの瞬間、みさとの舌がもつれ派手に読みまちがえてしまった。

「——ごめん、やつぱり無理」

ガタリと音をたてて椅子を立った。ヘッドフォンを取りさり、バサバサと原稿をまとめる。

「わたし、やつぱりやめとく、大会。こんなじゃ、きつと予選も通らないもの」

逃げるように出口に向かおうとしたとき、目の前でドアが開いた。葉月だった。

「どうしたの?」

真剣な目で問いかけてくる。みさとは目をそらした。

「どうもしない」

「ここが限界だから、とつぶやく。」

「しょうがないよ、これ以上やっても。やっぱり無理だったんだよ、わたしには。ごめんね葉月、——でも無駄だと思う。これが実力だし」

えへへと笑って手にした原稿をくるくると丸めた。目を伏せてつぎの言葉を待つ。葉月は怒鳴るだろうか。怒ってにらみつけるだろうか。でもしかたない。なにをやっても宙ぶらりんの、——これがみさとだ。

いつまで待ってもなにも言わないので顔を上げると、葉月が泣いていた。眉間にしわを刻んだ怒りの形相で、顔じゅうを涙で濡らしていた。

「死ね、ブス」

葉月はドアを押し開け荷物を抱えと、床を踏みならして放送室を出ていった。

〈中略4〉

「なんかあった？ 真野と」

黙りこんだみさとに新納が尋ねる。防音室のなかのことだったので、外にいた部員たちには聞こえていないはずだった。

「……なんかあったに決まってるけどな」

古場たちも気にしてたぞ、とつけくわえる。みさとはそつと首を 。しばらく言いあぐね、口を開く。

「……軽蔑された、葉月に」

「えっ、なに言われた、まさか」

ブス？ とおそろおそろの口形で聞かれ、みさとは曖昧にうなずいた。

嘘だろう、と声をあげる。さすがに「死ね」と言われたことまでは言えなかった。

「あのさ」

しばらくして新納が言った。

「……たぶんだけど。そういう言葉って、半分は自分に言ってるんじゃないかと思うんだ。いっぱいあるじゃん、やな言葉。うざいとか消えろとか、死ねとか黙れとか」

考えるようにゆっくりと言葉を選びながら言う。陽が落ちかけて、新納の顔が半分薄闇に陰って見えた。

「ほんとに自信あるやつは、たぶん言わない。——でもたいていは、弱いから。自分に自信なくて、怖いからさ。だから言われる前にだれかにぶつけて、それで安心するんだよ」

くだらないよな、とひっそり笑う。

「でもその気持ちもちよつとわかる。言いたくなることもあるもん、おれも」

みさとが目を見はると新納は気まずそうな顔をした。

「……真野のあれも、たぶんそんな感じなんじゃないかな」

〈中略5〉 次の日、葉月は学校を休みました。みさとは休み時間に古場から去年の地区大会の作品を録ったCDを手渡され、葉月が全国大会は辞退していたことを知ります。

その日、みさとは部活を休んだ。

編集作業に入った古場たちはともかく、みさとはもうあまりできることはない。関先生（副顧問の先生）に断りを入れ、ひとりで校門をくぐった。曙杉を通りすぎ、坂道を下る。

曲がり角で立ちどまった。まっすぐ下ればみさとの家、左へ折れば葉月の家がある。少し悩んで、左へ折れた。

葉月のマンションの前で、再びためらう。

——やっぱり、やめておこうか。

くるりと背を向けたところで、大きな人影にぶつかりそうになった。新納だった。

「——え。なんでいるの、部活は？」

「そつちこそ」

新納が動かないのでみさとも前に進めない。無理に横を通りぬけようとしたら前をふさがれた。じろりとにらみつけたら新納はそっぽを向いて知らん顔をしている。

「……覚えてなさいよ」

再び踵を返し「引き返し」、やけくそな気持ちでインターフォンを押した。

「はい」

葉月らしい声がする。みさとが名乗ると、しばらく無言がつづいた。

「ちよつと、話ができない？」

みさとが言うのと、ためらう気配のあと、

「べつに、話すことないから」

と声が返ってきた。

「……じゃあ」

切る気配がしたとき、後ろから新納がぐいと首をつきだしてきた。

「逃げるのか、真野」

みさとの肩越しにインターフォンに顔を近づけている。

「——さつさと降りてこい、ブス」

ぎょつとして耳を疑うと、ぶつりと乱暴にインターフォンが切れた。ほとんど間を置かずエレベーターが開いて葉月が降りてきた。遠目にも怒っているのがわかる。

エントランスのドアが開くなりすごい剣幕で新納をにらみつけた。新納はとぼけてあらぬほうを向いている。みさとはおろおろとふたりを見くらべた。

「……あの、とりあえず、ほかの場所行かない？」

公園のベンチで、みさとはかばんから古場にもらったCDを出してみせた。タイトルを見て葉月の表情がわずかに動いたが、なにも言わなかった。

「——これ、聴いてもいい？」

葉月は黙っている。新納はふたりから少し離れた場所に関係なさそうな顔で立っている。

「葉月が嫌なら、聴かない」

これは返す、見なかったことにする、と言うと、葉月はぎゅつとくちびるを噛んだ。

「——約束するなら」

硬い声で言う。

「なにを？」

「それを聴いたあと、もうわたしに関わらないって」

そしたら聴いていいよ、と挑むような口調で言った。みさとは少し考えて答えた。

「無理」

「なんで」

大きな目でぎろりとにらみつけてくる。ああそつだ。これが葉月だ。

「やっぱり好きだもん、葉月のこと」

葉月の瞳が大きく揺れた。

言おうと思ったことはいろいろあった。昨夜からずっと考えていて、けれど口から出てきたのはこの言葉だった。

「好きだよ」

死ねでブスだけど、とつけくわえると、葉月はぱつとすごい勢いで背中を向けた。そのまま動かない。

遠くで夕方のメロディが鳴りはじめた。『七つの子』だ。葉月はまだ向こうを向いている。

「……泣かないでよ」

「泣いてないっ」

再びぱつとふり向きかみつこうに言う。よけいなこと言わないでよばか、と言つて、今度こそ本当に泣いた。新納があきれた顔でこつちを見ていた。

それからふたりでいろいろな話をした。

ようやく葉月が勢いよく涙をかんだころ、あたりはすっかり夕焼けに彩られていた。

「——やつと片づいた？」

新納がぶらぶらとベンチに近寄ってきた。まだいたの？ と言うと、新納は、なんだよとがっくり肩を落とした。

「ヒマ人」

葉月がティッシュで鼻を擦りながら言う。新納はちえ、とため息をついたあと、視線を外したままぼそりとつぶやいた。

「——初めてブスって言われた感想は？」

葉月は耳まで赤くして、ぐつと悔しそうな顔で新納をにらみつけると、

「——ブスって言うやつが、ブース！」

と子どものような口調で言った。

その夜、家族がみんな寝静まったころ、みさとは古場にもらったCDをそつとデッキに滑りこませた。CDは二枚組だった。一枚にはアナウンスと朗読の部が、もう一枚にはラジオ番組の部が収められている。初めはラジオ番組を選んだ。エアフォンをして再生ボタンを押し、ベッドの上で壁に背中をもたせかけた。静かに再生が始まる。

会場内のざわめきや拍手から始まるそれを、みさとは早速りせず順に聴いていた。目を閉じ、会場のようすを思いうかべながら耳を澄ます。出品されたラジオ番組は意外に数が少なく、ぜんぶで十にも満たなかった。まんなかあたりで葉月の学校の作品が流れてきた。

タイトルは、『学校へ来られないあなたへ』だった。

幼馴染みだったのだ、と葉月は言った。

おとなしくてひっこみ思案で、優しくいつにもこにこしている子だったと。だから正義感が強く勝ち気な葉月は、いつも保護者のような役割だったのだという。

その彼女が、小学校の高学年になったあたりから学校を休むようになった。

いろいろな事情があったのだと思う。理由はひとつではないだろう。その後べつべつの中学校へ進むと、ますます欠席が増えていったらしい。自分の学校生活を楽しまながら、それでも葉月は常に彼女のことを気にかけていた。ときおり、メールで自分の近況や学校のことなどを報告したが、返事は間遠になっていった。

二年生に上がるころにはその子はほとんど家から出なくなっていた。放送部で活躍していた葉月は、だからその年のコンクールの話が出たとき、まっさきにそのテーマを思いついたのだという。学校に来られない子たちを励ましたい、その思いで生徒や先生の声を集め、専門家に話を聞きに行った。ひとつの作品にまとめ、できあがったそれを持って葉月はその子を訪ねた。

「喜んでもらえるよ、あのときは、本気で信じてたんだよ」
「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」
「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」

「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」
「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」

「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」
「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」

「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」
「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」

「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」
「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」

「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」
「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」

「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」
「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」

「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」
「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」

「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」
「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」

「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」
「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」

「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」
「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」

「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」
「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」

「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」
「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」

「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」
「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」

「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」
「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」

「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」
「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」

「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」
「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」

「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」
「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」

「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」
「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」

「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」
「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」

「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」
「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」

「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」
「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」

初めて聴くマイクを通した葉月の声だった。みさとはそっと目を閉じた。
「——にわかによだかは口を大きくひらいて、はねをまっすぐに張って、まるで矢のようにそらをよこぎりしました。小さな羽虫が幾匹も幾匹もその咽喉にはいりました」

よだかはとても醜い鳥で、仲間から蔑まれていた。そんな話だったはずだ。

「夜だかと思いついて飛ぶときは、そらがまるで二つに切れたように思われます。一正の甲虫が、夜だかの咽喉にはいつて、ひどくもがきました。よだかはすぐそれを呑みこみましたが、その時何だかせなかがぞつとしたように思いました」

「知らなかったの？ あんたのそばにいて嬉しかったことなんか一度もない」
憎しみに満ちた目でそう言われた。

「また一正の甲虫が、夜だかのどに、はいりました。そしてまるでよだかの咽喉をひつかいてばたきました。よだかはそれを無理にのみこんでしまいましたが、その時、急に胸がどきつとして、夜だかは大声をあげて泣き出しました。泣きながらぐるぐるぐるぐる空をめぐったのです」

「これ以上わたしを、あんたの手柄のための材料にしないで」
彼女は絞りだすようにそうも言った。

「ああ、つらい、つらい。僕はもう虫をたべないで餓えて死のう」
地区大会のあと葉月は放送部をやめた。自分自身あまり学校に足が向かなくなり、やがて周囲に勧められて、この春、転校した。

「……ごめん。これでわたしがアドバイザーなんて、ほんと、笑っちゃうよね」
公園のベンチに座った葉月は、最後にそう言ってひっそりと笑った。

静かな夜だった。イアフォンを通して耳に流れこんでくる葉月の声が、みさとの内側を震わせながら深いところへ落ちていく。あまり抑揚をつけず淡々と読んでいくのに、胸が痛くなった。

無口できれいで、だれともつるまない葉月。

すべての作品を聴きおえ音が止まった。みさとはCDを取り出すと、きちんとケースに収めて机の引きだしの奥にしまった。

明日、アナウンス原稿の録音をもう一度やりなおそうと思いながら、眠りについた。

問5 傍線部④「たった今投げつけられた言葉がまだそこに放りだされたまま」から、みさとのどのような様子が読みとれますか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 男子生徒の言葉に傷つき、葉月からのなぐさめの言葉 wait している様子。

イ 信号に気をとられていたため、男子生徒の言葉をよく理解できない様子。

ウ 男子生徒の言葉にショックを受け、気持ちの整理がまだついていない様子。

エ 自分を見下した男子生徒の言葉に対して、何も言い返すことができない様子。

問6 傍線部⑤「首を□」は、おどけたしぐさを表す慣用句です。空欄に入る最も適切な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ふった イ かしげた ウ まわした エ すくめた

問7 傍線部⑥「べつに、話すことないから」と言っていた葉月の気持ちが、傍線部⑦中の「子どものような口調で」話せるように変化していきます。葉月の心がこのように変化したことが読みとれる最初の描写を、傍線部⑥から傍線部⑦までの本文中から十〜十五字以内で抜き出し、始めの五字を答えなさい。

問8 傍線部⑧「なんで。なんでみんなわからないの」とありますが、ここでの葉月の気持ちを説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 部員や顧問の先生は作品の出来に満足しているが、自分としては納得のいく完成度ではないため、さらに良い作品に作り直して改めて出品したいとむきになっている。

イ 自分が作った作品を出品することで不登校の友人に責められるのではないかと不安を抱き、一刻も早くこの作品の出品取り消しを認めさせなければならぬとあせっている。

ウ 作品の出品を取り消したいといくら話しても聞き入れてくれない部員や顧問の先生の浅はかさに落胆しつつ、誰からも理解されない孤独さの中で一人意気こんでいる。

エ 出品しようとしていた作品が不登校の子たちのことを何もわかっていないものだと思いついて出品を取り消したいのに、部員や顧問の先生に理解されないためじれったい思いでいる。

問9 傍線部⑨「気がつけばC Dの再生が終わっている」という描写からどのようなことが読みとれますか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア C Dの内容はどれも予想以上にすばらしく、みさとは時間を忘れてしまうほど作品に聴き入っていたということ。

イ C Dの内容を聴きながらも、みさとの意識は葉月が語ってくれた過去のつらい体験の方に向かっていったということ。

ウ C Dの音をベッドの上で聴くうちに自然と眠気が込み上げ、いつのまにかみさどが寝入ってしまったということ。

エ C Dを聴くうちにみさとは大会に出ている気分になり、会場の雰囲気や観客の反応に意識が向かっていたということ。

問10 傍線部⑩「僕はもう虫をたべないで餓えて死のう」とありますが、ここでの「虫をたべない僕」とは何を意味していますか。その内容が書かれた部分を9ページの本文中から十五字以内で抜き出し、答えなさい。

問11 次は、波線部「いつまで待っても――」死ね、ブス」における葉月の心情を説明した文章です。空欄に入る適切な語をA・C・Dは本文中から二字で抜き出し、Bはひらがな五字で自分で考え、それぞれ答えなさい。

葉月は去年、不登校の幼馴染みを励ましたい一心でラジオ番組を制作したが、その結果かえって幼馴染みを傷つけてしまった。それ以来、アナウンスに「A」が持てなくなっていたところ、転校先の放送部でみさとのアドバイザーを引き受け、力になりたいと考えようになった。そのみさどが大会に出ないと言いだした時には、思い入れを持って頑張ってきただけにショックを受けると同時に、みさとの力になりきれなかった自分に「B」を感じた。強気の裏に「C」内面をかかえる葉月は、その「B」への苛立ちをみさどにぶつけ、「D」の言葉を発してしまったと考えられる。

問12 傍線部⑪について、「明日、アナウンス原稿の録音をもう一度やりなおそうと思」ったのはなぜですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 侮辱的な言葉を投げつけた葉月の気持ちを理解した今、親身になってアドバイスしてくれる葉月の期待に応えたいと思ったから。

イ 侮辱的な言葉の背景には不登校の友人の存在があったことを知り、その友人のためにも最高の作品に仕上げようと思ったから。

ウ 侮辱的な言葉を投げつけた葉月が大会では成功しなかったことを知り、自分が入賞することで葉月を見返してやりたいと思ったから。

エ 侮辱的な言葉の背景にはみさどへのライバル意識があったことを理解し、本気で取り組むことで葉月に敬意をはらおうと思ったから。

国語

解答用紙

受験番号

得点

※

※	※	※	※	※	※			
問 10				問 7	問 6	問 5	問 2	問 1
エ	ア	Y	X					a
								ホ
								ド
	イ			問 8				コ
								(す)
オ								b
				問 9	}	}	問 3	ハ
								ブ
	ウ							(いたり)
							問 4	c
								ハ
								ラ
								(って)
								d
								ク
								ル
								(った)

※	※	※	※	※		
問 12	問 11	問 10	問 7	問 4	問 2	問 1
	A					a
						挑
	B			問 5	問 3	
						(む)
						b
			問 8	問 6		
						彩
						(られ)
	C		問 9			
	D					